

平成二十八年 第二期入試

国語問題用紙

千葉日本大学第一中学校

注意 答えは解答用紙の解答らんに記入し、
問題用紙は持ち帰ってください。

一

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

第二章で、怒濤の如く人々が押し寄せる展覧会がある **A**、閑古鳥が鳴いている展覧会もあり、その差が極端で私たちはどうも他者に「煽られる」傾向があるのではないかとふれました。怒濤の如く人々が押し寄せる展覧会は、ものすごく売れるベストセラー本を思わせるものがあります。出版界では、いま「**B**」の消滅が問題になっています。売れる本は何十萬部あるいは何百萬部と売れるのに、売れない本はまったく売れないという二極化現象が際立っているのです。かつてはベストセラーとまではいなくても、「**C** 売れる本」が数多くあり、そういう中間層が出版文化を支えていました。**D**、いまや本の売れ具合は「ホームランか、三振か」の趣だといえます。「ホームラン」をよく出している出版社の人にその「秘密」を聞いたところ、一つの鍵はテレビで取り上げてもらったことだそうです。テレビで「この本は面白いですよ」と紹介してもらおうと一気に売れ始め、**E**、いったんベストセラー情報に乗れば、あとは放っておいても売れてくれるのだといえます。

この現象を「**ラーメン屋さんの行列**」になぞらえた人がいます。ラーメン屋さんの行列は、とにかく行列ができてさえいれば、あとは「みんなが並んでいるのだから、おいしそうだ」とどんどん客が集まるというのです。ラーメン屋さんの行列も、ホームランの本も、怒濤のように観客が押し寄せる展覧会も、メカニズムは共通したものがあろうです。

そのメカニズムとは「みんなが並んでいるのだから、おいしそうだ」と

いうことでしょう。「みんなが並んでいる」という他者のふるまいによって自分の行動を決定しているわけで、必ずしもその人自身の主体性によるものではありません。**F**「つられて」他人本位に動いているのです。私たちにはそういう面があるのではないのでしょうか。

二〇二〇年の東京オリンピックをめぐる動きでこんなことがあったのにお気づきでしょうか。二回目となる東京でのオリンピック開催について、東日本大震災直後の二〇一一年七月の時点では世論の趨勢は「反対」が占めていました。「反対」の理由は「オリンピックを開くお金とリソースがあれば東北地方のフックウに回してほしい」「首都直下地震のリスクが高まっているから」「福島原発事故がまだシユウソクしていないから」といったことが挙げられていました。しかし、一年後の二〇一二年七月には「サンセイ」が「反対」を上回り、ついにはオリンピック招致に成功したのは周知の通りです。一年を経たからといって、当初「反対」の理由とされた状況に大した違いは生じていません。いまもって東北のふっこうはまだまだだし、首都直下地震のリスクも変わらないし、福島第一原発事故もしゅうそくにはほど遠いありさまです。にもかかわらず、世論は正反対に変わったのです。

事実が変わりがないのに、わずか一年で世論がコロッと変わったのはなぜだったのでしょうか。おそらく、多くの人々は自分の主体性というより、周りの「空気」に合わせて判断しているため、このような変化が起こったのでしょう。いまやオリンピックに「反対」を唱えるのは変わり者

といった雰囲気さえあり、異論がいろいろ日本人の典型的な事例になっている感があります。

あの福島第一原発事故も、もし東京電力の誰かが大津波のリスクについて声を上げていれば④ジタイは違った可能性があります。あるいは、当時の原子力安全委員会や原子力安全・保安院の誰かが「対策が十分ではない」と指摘していれば事故は防げたかもしれません。そのように、つきつめていえば、原発事故も一人ひとりの主体性が十分ではなかったからこそ起こったのであり、異論を④発する人がいれば避けられたことだったのかもかもしれません。

日本人は組織や集団のなかで一人だけ違った行動をとったり、意見をいったりするのが⑤憚られるところがあるように思います。「KY」という言葉があります。「空気を読めない」ということで、周りのフンイキに合わせた発言やふるまいができない人はアホだということです。ところが、この「空気を読む」ということについて、タレントのバックンことパトリック・ハーランさんは驚くべきことを述べています。「俺たち(外国人)は、空気を讀むなんてことはしないよ」というのです。周りに合わせた発言ではなく、自分の考えたことをいう。当たり前といえば当たり前です。しかし、「KY」などといっている日本人にはなかなかできないことなのでしょう。

アート鑑賞は、私たちの主体性を育んでくれます。ほかからの借り物ではない、自分自身のものの見方や考え方を培ってくれるポテンシャルを秘めています。もし、知り合いや友人と展覧会に行ったら、感想を交換して

(注1) リソース……手段・方策

(注2) リスク……危険

(注3) ポテンシャル……潜在する力

問一 空欄 **A**、**D**、**E**、**F** に入る語を

次より選び、記号で答えなさい。

- 1 いわば 2 一方 3 しかし 4 そして

問二 空欄 **B** に入る語句を次より一つ選び、記号で答えなさい。

- 1 ベストセラー 2 出版文化 3 芸術性 4 真ん中

問三 空欄 **C** に入る語句を次より一つ選び、記号で答えなさい。

- 1 なかなか 2 さまざま 3 そこそこ 4 そもそも

問四 — 線部①「二極化現象」が生じている原因を説明したものを次より一つ選び、記号で答えなさい。

1 ラーメン屋の行列のように、好悪が明確に分かれるから。

2 日本の文化は、あらゆるものを比較して価値づけるから。

3 かつての中間層にみられるように自分で判断しなくなったから。

4 テレビなどで話題となったものに飛びつく傾向があるから。

ください。周りの人の声に合わせるのではなく、ぜひ「異論」をいつてみてください。たとえ、どんな意見であろうとも、あなたがほんとうにそう感じたり考えたりしたのなら、それがあなたの意見です。人とは違う「異論」であったとしても、そんなことはかまわないのです。

ふだんから「異論」をいうことに一人ひとりが慣れれば、社会は違ったものになっていく可能性があります。ドイツの思想家にゲオルク・ジンメル(一八五八―一九一八)という人物がいます。この人は、それまでとはまったく違った社会の捉え方をし、その後の社会学や思想史の発展に大きな影響を及ぼしました。ジンメルの社会の捉え方の特徴は、社会を確立された一つのものとして見るのではなく、一人ひとりの人間が互いに影響を及ぼし合いながらかたちづくる動的なものとして見た点にあります。ジンメルの考えでは、社会の本質は人と人のあいだにあり、個々の人がどうふるまうかによって社会のあり方は変わって来るとしました。ジンメルの見方に立つと、**G** という視界が開けます。

個々人が「異論」をいうことのできる社会は多様性が保障された社会です。あえて人と違うことをいおうとまでする必要はないでしょうが、自分の考えを持ち、自分の考えにもとづいて、自分の意見を表明するということが、人を成長させ、ひいては社会の健全性を保つということを私たちは知っておかなくてはなりません。欧米では自分自身の考えや意見のない人は、むしろ「人生の基盤」を持たない人として奇異に見られるくらいです。

(「アートを見るということ」『アート鑑賞、超入門』藤田令伊著)

問五 — 線部②「ラーメン屋さんの行列」にみられる私たちの考えを説明しなさい。

問六 — 線部①、②、③、④のカタカナを漢字に直して答えなさい。

問七 — 線部⑤、⑥、⑦、⑧の漢字の読みをひらがなで答えなさい。

問八 — 線部⑨、⑩の語の意味を次より一つ選び、記号で答えなさい。

- ⑦
- 1 定番
2 表明
3 状況
4 成行き

- ⑩
- 1 確実にわかること
2 限定的に知られること
3 広く知れ渡ること
4 意味不明であること

問九 — 線部③「世論は正反対に変わった」こと理由を説明する一文を抜き出し、初めの五字を答えなさい(句読点を含む)。

問十 — 線部④「異論」を作者は本文全体の中でどのようなものと説明していますか。説明している部分を十字以内で抜き出して答えなさい。

問十一 — 線部⑤「俺たち(外国人)は、空気を讀むなんてことはしないよ」について。「外国人」から見た日本人の「KY」感覚を持った人ほどのような存在と見られていますか。説明している部分を二十五字以内で抜き出して答えなさい。

問五

空欄 G

に入る語句を次より一つ選び、記号で答えなさい。

- 1 自分と社会は分離した存在であり、自分と他者の積極的考えが相よって社会がつくられていく。
- 2 自分と社会は分離した存在であり、自分の考えの特異性が広がって社会をつくっていく。
- 3 自分は社会の当事者であり、自分の積極的能動的な関わりが社会をつくっていく。
- 4 自分は社会の当事者であり、自分の消極的間接的な関わりが社会をつくっていく。

問六

線部⑥「社会の健全性」を主張する前提として日本の社会における日本人の特徴をどのように説明していますか。その一文を抜き出し、初めの五字を答えなさい(句読点を含む)。

「これ、書名正しいですか？」店員は困ったように私に訊いた。「と、思いますけど」

「著者名も？ 該当する作品が、見あたらないんですよ」

「はあ」

私と店員はしばらくのあいだ見つめ合った。見つめ合っているかもしれない、ひとつお辞儀をして私は大型書店を去った。

「おばあちゃん、なかったよ」

そのまま病院に直行して言うと、おばあちゃんはあからさまに落胆した顔をした。こちらが落ちこんでしまうくらいの落胆ぶりだった。

「本のタイトルとか、書いた人の名前が、違ってるんじゃないかって」「違わないよ」ぴしゃりとおばあちゃんは言った。「あたしが間違えるはずがないだろ」

「だったら、ないよ」

③ おばあちゃんは私の胸のあたりを見つめていたが、「さがしかたが、甘いんだよ」すねたように言った。「どうせ、一軒いってないって言われてすぐ帰ってきたんだろ。店員も、あんたとおんなじような若い娘なんだろ。もつと知恵のある店員だったらね、あちこち聞い合わせて、根気よく調べてくれるはずなんだ」

そうしてふいと横を向き、そのままいびきをかいて眠ってしまった。私はメモ書きを手にしたまま、パイプ椅子に座って空を見た。季節は冬になろうとしていた。空から目線を引き下げると、バス通りと、バス通り

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

中学二年生の羊子が入院しているおばあちゃんのお見舞いに行き、おばあちゃんから本を探そう頼まれた場面である。

「えー、聞いたことないよ、こんな本」私は言った。

「あんたなんかなんにも知らないんだから、聞いたことのある本の方が少ないだろうよ」

① おばあちゃんは言った。こういうもの言いをする人なのだ。

「出版社はどこなの」

「さあ。お店の人に言えばわかるよ」

「わかった。さがしてみるけど」

メモをスカートのポケットに入れると、おばあちゃんは私を手招きした。ベッドに身を乗り出して耳を近づける。

「そのこと、だれにも言うんじゃないよ。あんたのおかあさんにも、おばさんたちにも。あんたがひとりできがしておくれ」

おばあちゃんの息は不思議なおいがした。いいにおいか、くさいにおいかと言われれば後者②だけけれど、嗅いだことのない種類のものだった。そのにおいを嗅ぐと、なぜか、泣いている母を思い出すのだった。

おばあちゃんの言葉通り、次の日、私はメモを持って大型店にいった。そのころはコンピュータなんてしろものもなく、店員は、⑦ プアツい本をばらばらめくって調べてくれた。

縁取る街路樹が見えた。木々の葉はみな落ちて、寒々しい枝が四方に広がっている。

すねて眠るおばあちゃんに視線を移す。私の知っているおばあちゃんより、ずいぶんちいさくなってしまった。それでも、もうすぐ死んでしまう人のようにはどうしても見えない。また、もうすぐ死んでしまうのかもしれない、不思議とわたしはこわくなかった。④ きっと、それがどんなことなのか、まだ知らなかったからだろう。今そこにいるだけだが、永遠になくなってしまふということが、いったいどんなことなのか。

その日から私は病院に行く前に、書店めぐりをして歩いた。⑤ 繁華街や、隣町や、電車を乗り継いで都心にまで出向いた。いろんな本屋があった。① ザッゼンとした本屋、歴史小説の多い本屋、店員の親切な本屋、人のまったく入っていない本屋。しかしそのどこにも、おばあちゃんのさがす本はなかった。

手ぶらで病院にいくと、おばあちゃんはきままつて落胆した顔をする。⑤ 何か意地悪をしているような気持ちになってくる。

「あんたがその本を見つけてくれなけりや、死ぬに死ねないよ」

あるときおばあちゃんはそんなことを言った。

「死ぬなんて、そんなこと言わないでよ、縁起でもない」

言いながら、はつとした。私がおもしこの本を見つけたさなければ、おばあちゃんはおもし少し生きるのではないか。ということは、見つからないほうがいいのではないか。

「もしあんたが見つけだすより先にあたしが死んだら、化けて出てやるからね」

⑥ 私の考えを読んだように、おばあちゃんは真顔で言った。

「だって本当にないんだよ。新宿にまでいったんだよ。いったいいつの本なのよ」

本が見つかると、このまま見つけられないことと、どっちがいいんだろう。

そう思いながら私は

⑦ を尖らせた。

「最近の本屋ってのは本当に困ったもんだよね。少し古くなるといい本だろうがなんだろうがすぐひっこめちゃうんだから」

おばあちゃんがそこまで言いかけたとき、母親が病室に入ってきた。おばあちゃんは

⑦ をつくむ。母はポインセチアの鉢を抱えていた。手にしていたそれを、テレビの上に飾り、おばあちゃんに笑いかける。母はあの日から泣いていない。

「もうすぐクリスマスだから、気分だけでもと思って」母はおばあちゃんをのぞきこんで言う。

「あんた、知らないのかい、病人に鉢なんか持つてくるもんじゃないんだよ。鉢に根付くように、病人がベッドに寝付いちまう、だから縁起が悪

いんだ。まったく、いい年してなんにも知らないんだから」

⑧ 母はうつむいて、ちらりと私を見た。

「クリスマスっぽくていいじゃん。クリスマスが終わったら私が持つて帰るよ」

に至っては砂糖の量を間違えたのかまったく甘くなかった。クリスマスプレゼントのことはみんな忘れていたようで、私は何ももらえなかった。

⑨ そうして例の本も、私は見つけられずにいた。

クリスマスプレゼントにできたらいいと思って、私はさらに遠出をして本屋めぐりをしていたのだが、そのなかの一軒で、年老いた店主が、たぶん絶版になっていると教えてくれた。昭和のはじめに活躍した画家の書いた、エッセイだということも教えてくれた。それで、それまで入ったこともなかった古本屋にも、足を踏み入れていたというのに。

⑩ 黒こげチキンの次の日、冬休みに入っていた私は朝早くから病院にいった。見つけられなかった本のかわりに、黒いくまのぬいぐるみ持っていった。

「おばあちゃん、ごめん、今古本屋さがしてる。かわりに、これ」

おばあちゃんはずいぶん瘦せてしまった腕でプレゼントの包装をとき、酸素マスクを片手で外してすけすけと言う。

「まったくあんたは子どもだね。ぬいぐるみなんかもらったってしょうがないよ」

これにはさすがにかちんときて、個室なのをいいことに、私は怒鳴り散らした。

「おばあちゃん、わがまますぎるっ。ありがとくらい言えないのっ。私だって毎日毎日日本屋歩いてるんだから。古本屋だって、入りづらいのがんばって入ってるんだから。古本屋に私みたいな若い子なんかいないのに、それでも入ってって、愛想の悪いおやじにメモ見せて、がんばってさ

母をかばうように私は言った。おばあちゃんのランボウなもの言いに私は慣れているのに、もっと長く娘をやっている母はなぜか慣れていないのだ。

⑪ アンジョウ、その日の帰り、タクシーのなかで母は泣いた。またもや私は、ひ、と思う。

「あの人は昔からそうなのよ。私のやることなすことすべてにけちをつける。よかれと思ってやっていることがいつも気に入らないの。私、何をしたらあの人にお礼を言われたことなんかないの」

タクシーの中で泣く母は、クラスメイトの女の子みたいだった。母の泣き声を聞いていると、心がスポンジ状になって濁った水を吸い上げていくような気分になる。

あああ、と私は思った。これからどうなるんだろう？ 本は見つかるのか？ おばあちゃんは死んじゃうのか？ おかあさんとおばあちゃんは仲良くなるのか？

⑫ なんにもわからなかった。だって私は十四歳だったのだ。

クリスマスを待たずして、おばあちゃんは個室に移された。点滴の数が増え、酸素マスクをはめられた。それでも私はまだ、おばあちゃんが死んでしまうなんて信じられなかった。病室では笑っている母は、家に帰ると毎日のように泣いた。おばあちゃんが個室に移されたのは、私が鉢植えを持つていったからだと言って泣いた。

その年のクリスマスは冷え冷えとしていた。私が夏から楽しみにしていた母のローストチキンは黒こげで食べられたものではなかったし、ケーキ

がしてるんだから。それに、おかあさんにポインセチアのお礼だって言いなよっ」

おばあちゃんは目玉をばちくりさせて私を見ていたが、突然笑い出した。私の覚えているよりは数倍弱々しい笑いではあったけれど、それでもすごくおかしそうに笑った。

「あんたも言うときは言うんだねえ。なんだかみんな、やけにやさしいんだもん、調子くるってたの。美穂子なんかあたしが何か言う目くじらたてて言い返してきたくせに、やけに素直になっちゃって」

美穂子というのは私の母である。外した酸素マスクをあごにあてて、おばあちゃんは窓の外を見て、小さな声で言った。

「あたし、もうそろそろいくんだよ。それはそれでいいんだ。これだけ生きられればもう充分。けど気に入らないのは、みんな、美穂子も菜穂子も沙知穂も、人が変わったようにやさしくすること。ねえ、いがみあってたら最後の日まで人はいがみあってたほうがいいんだ。許せないところがあつたら最後まで許すべきじゃないんだ、だってそれがその人とその人の関係だろう。相手が死のうが何しようが、むかつくことはむかつくっていったほうがいいんだ」

おばあちゃんはそう言って、酸素マスクを口にあてた。くまのぬいぐるみを、自分の隣に寝かせて目を閉じた。くまと並んで眠るおばあちゃんは、おさない子どもみたいに見えた。

問一 〱線部㉗、㉘のカタカナは漢字に、漢字の読みはひらがなに直して答えなさい。

問二 〱線部①「こういうもの言い」とあるが、これはどのようなことを表しますか。次より一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 知らないという孫を馬鹿にし、張り合うような性格であること。
- イ 知らないという孫に皮肉をいうような性格であること。
- ウ 知らないという孫が恥ずかしくないようにかばう言い方をするような性格であること。

エ 知らないと言われたことが悲しかったが、強がる性格であること。

問三 〱線部②「後者」の表す語を文中から抜き出して答えなさい。

問四 〱線部③「さがしかたが、甘いんだよ」と言っているが、おばあちゃんは羊子にどうして欲しいと思つていますか。三十五字以内で文中の言葉を使つて答えなさい(句読点を含む)。

問五 〱線部④「それ」とあるが、この指示語が表している内容を二十字以上、三十字以内で説明している部分を文中より探し、始めと終わりの三字を抜き出して答えなさい(句読点を含む)。

問六 〱線部⑤「何か意地悪をしているような気持ちになつてくる」とあるが、それはなぜですか。次より一つ選び、記号で答えなさい。

- ア おばあちゃんに頼まれた本を探せずにいるから。
- イ 何も持たないで行くと、おばあちゃんが必要がつかかりするから。
- ウ 本当は面倒だと思ひながら探しているから。
- エ おばあちゃんに本気で探していないことがばれたから。

問七 〱線部⑥「私の考え」とはどのような考えですか。次の中から適当な答えを全て選び、記号で答えなさい。

問八 〱線部⑦「さかしたかたが、甘いんだよ」と言っているが、おばあちゃんは羊子にどうして欲しいと思つていますか。三十五字以内で文中の言葉を使つて答えなさい(句読点を含む)。

問九 〱線部⑧「母はうつむいて」とあるが、母がうつむいたのはなぜですか。次より一つ選び、記号で答えなさい。

- 1 何が気にくわなかつたのか、本文からわかる部分を抜き出して答えなさい(句読点を含む)。
- 2 どうして気にくわなかつたのか、本文の言葉を用いて答えなさい。

問七 〱線部⑥「私の考え」とはどのような考えですか。次の中から適当な答えを全て選び、記号で答えなさい。

- ア おばあちゃんに意地悪をしているわけではないということ。
- イ おばあちゃんは縁起でもないことを言うこと困っていること。
- ウ 本が見つからなければ、おばあちゃんは死なないということ。
- エ 本が見つからなければ、おばあちゃんの寿命が必ず延びるとのこと。

オ 本は見つからない方が良くもしいれないということ。

カ 本当は本をさがすが大変で面倒であること。

問八 〱線部⑦「さかしたかたが、甘いんだよ」と言っているが、おばあちゃんは羊子にどうして欲しいと思つていますか。三十五字以内で文中の言葉を使つて答えなさい(句読点を含む)。

問九 〱線部⑧「母はうつむいて」とあるが、母がうつむいたのはなぜですか。次より一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 少しでもクリスマススの楽しい雰囲気を感じてもらいたいと思つていたのに、嫌味を言われてしまったから。
- イ 鉢植えを病室に持つてくる意味を初めて知らされ、どう言つていかわからなかつたから。
- ウ 娘である羊子の前で無知であることを実の母にのしられ、恥ずかしくなつてしまったから。
- エ 病気で弱々しくなつた母の前でも、昔自分が小さな娘だった時のように感じられ悔しかったから。

問十 〱線部⑨「なんにもわからなかつた」とあるが、この時の不安な

二 〱 次のことわざや慣用句について、□に共通する身体の一部を表す漢字を一字答えなさい。

- 1 赤子の□をひねる (たやすく楽々できること)
- に汗をにぎる (はらはらして見ている様子)
- 2 □もふたもない (あまりにも率直すぎること)
- 悪銭□につかず (何もせず得たものは何にもならず出ていくこと)
- 3 二階から□薬 (思うように目的が達成されないこと)
- から鼻にぬける (物わかりが良いさま)
- 4 寝□に水 (おもわぬできごとにあわてること)
- をそろえる (お金を不足なく用意すること)
- 5 泣きつ□にはち (不幸に不幸が重なること)
- かえるの□に水 (ふてぶてしいこと)

解答

二

- 問一 A 2 D 3 E 4 F 1
 問二 4
 問三 3
 問四 4
 問五 主体的に行動するのではなく、他者のふるまいにつられて他人本位に自分の行動を決めようとする考え。
 問六 イ 復興 ウ 収束 エ 賛成 キ 事態
 問七 カ ヘ「た」 ク はぐく「んで」 ケ つちか「って」 コ な「れて」
 問八 ア 4 オ 3
 問九 おそらく、
 問十 自分自身の考えや意見
 問十一 「人生の基盤」を持たない人として奇異に見られる
 問十二 3
 問十三 日本人は組

二

- 問一 ア 分厚「い」 イ 雑然 ウ 乱暴 エ 案「の」定 オ ぜっばん
 問二 イ
 問三 くさいにおい
 問四 あちこち本屋を回り、店員にも問い合わせ、根気よくさがしてほしい。
 問五 今そこ うこと
 問六 イ
 問七 ウ・オ
 問八 □
 問九 ア
 問十 母の泣き声
 問十一 クリスマス
 問十二 1 みんな、美穂子も菜穂子も沙知穂も、人が変わったようにやさしくするってこと
 2 自分の死が近くても態度を変えないで、家族には今までどおりにつき合ってほしいと思っているから。

三

- 1 手 2 身 3 目 4 耳 5 面

解説

一

- 問五 次の段落で「他者のふるまいによって自分の行動を決定しているわけで、必ずしもその人自身の主体性によるものではありません。』『つられて』他人本位に動いているのです」と述べられています。

二

- 問四 続く部分でおばあちゃんは「どうせ、一軒いってないって言われてすぐ帰ってきたんだろ。店員も、あんたとおんなじような若い娘なんだろ。もっと知恵のある店員だったらね、あちこち問い合わせ、根気よく調べてくれるはずなんだ」と言っています。

- 問十二 1 おばあちゃんは「いがみあってたら最後の日までいがみあってたほうがいいんだ。：だってそれがその人とその人の関係だろう。相手が死のうが何しようが、むかつくことはむかつくっていったほうがいいんだ」と、今までどおり普通に話しているという気持ちを感じています。